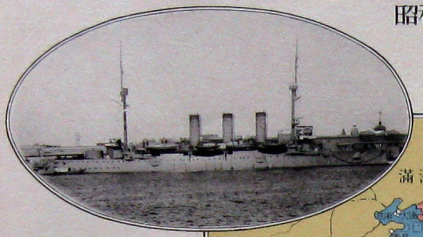
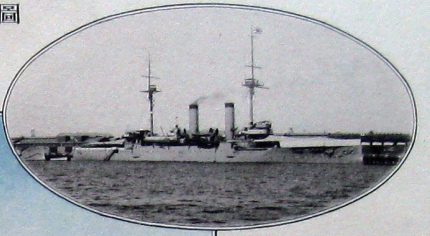
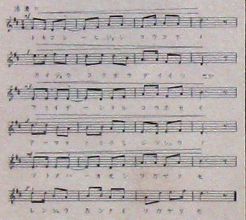
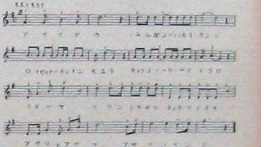
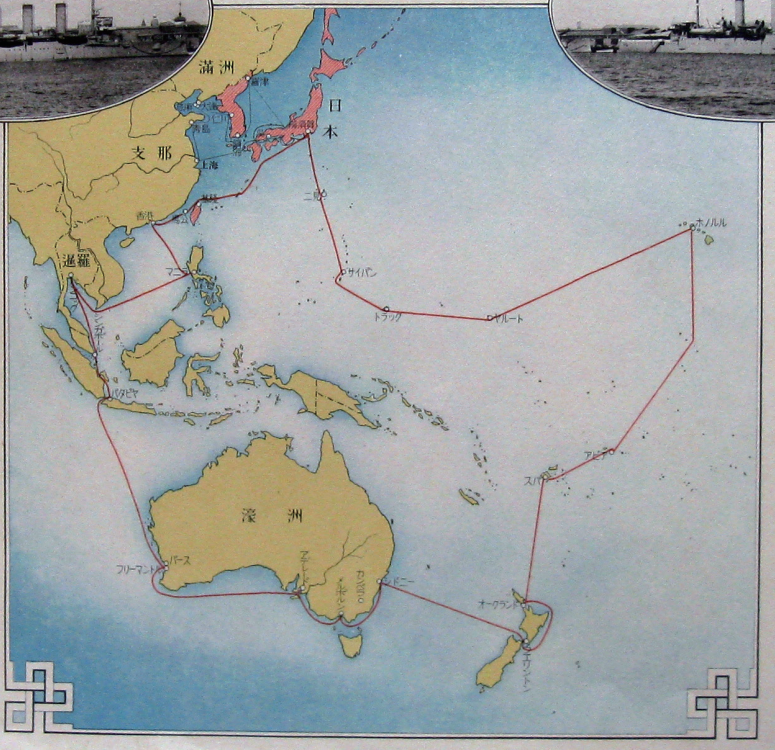
昭和九·十年度練習艦隊遠洋航海航跡圖











練習艦隊軍艦八雲の歌

一 時維れ非常時皇國の
踏み出したる偉業生
務は重きわが八雲

二 出雲八重山そのかみの
日露日獨役に
舉は高きわが八雲

三 海國日本海軍の
世界の海を征覇して
武運は長きわが八雲

海上國防第一線
訓練猛訓の實習の
練習艦隊わが八雲

武勳の功に劣らじと
精てしいうを精きて
練習艦隊わが八雲

選りすぐりたる丈夫は
艦のつとめにいそしめる
練習艦隊わが八雲

浪間健見の歌

浪間哉

ゆるがんばかり
健見六百
血潮にもえて
旭光の輝く
ところ見よや
眉宇に漲る
熱鐵の意氣
浪間々々浪間の健見

二、大國の矢翔るごと

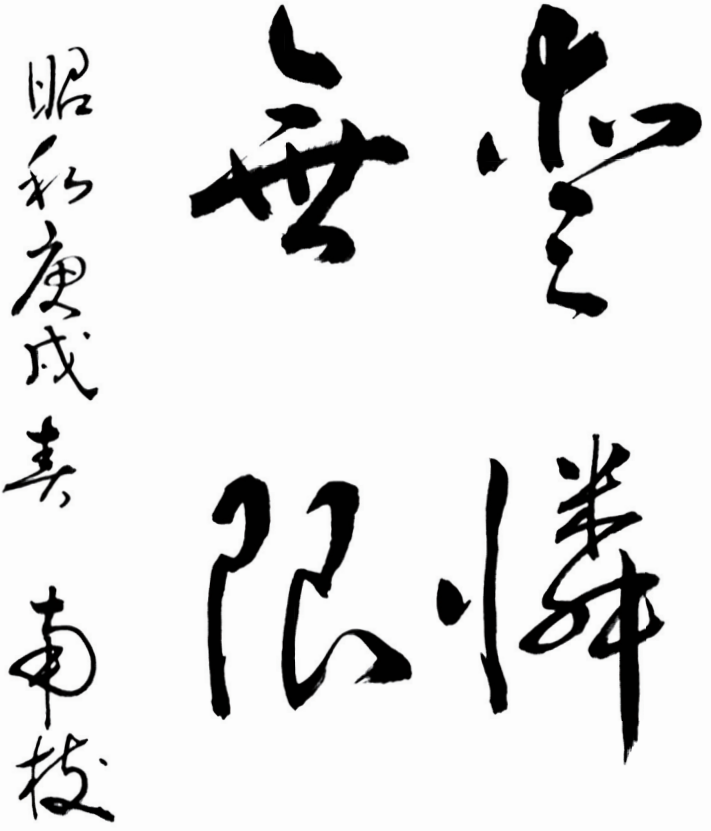
健見六百
双子をあげて
盛歡に燃え立つ
ところ
聞けや天にこだます
勝どきの聲
浪間々々浪間の健見

三、すめ神のみこと

かしこみ
健見六百
至誠にこもて
奉誓を誓立つる
ところ
卯げ奉投盛あまねし
六合の海
浪間々々浪間の健見

国産1号艦「はるかぜ」除籍記念　昭和60年3月

水谷秀澄40代の頃


無限
昭和庚戌春
南枝

海兵62期
水谷秀澄
回想メモ

目　次

はじめに…8

海軍兵学校時代…11
候補生時代…17
少尉時代…21
中尉時代…25
大尉時代…33
復員業務時代…47
海上自衛隊時代…51
我が経歴…57
—以上 S38.7 記述—

《別項》
海軍兵学校受験の頃…63
初陣…71
揚子江上の戦い…85
開戦…101
戦後の頃…109

《雑稿》

教育に想う…117
3ELP 時代指導指針覚…125
第 21 魚雷艇隊の思い出について…135
海上実習開始に当り実習員に訓示…143
遠航出発に当り乗員一同に対し司令官訓示…151
遠航雑感…155
自衛隊記念日における総監訓示…167
履歴書…171

あとがき…177

はじめに

父、水谷秀澄（みずたに ひですみ）は大正２年、熊本県の植木町に生まれました。鹿本中学から海軍兵学校（62 期）に進み太平洋戦争に従軍。主に南シナ海での作戦に参加、途中負傷したりして終戦は長崎で迎えています。その後熊本県庁で復員の仕事に携わり昭和 29 年に海上自衛隊に入隊、海将で除隊し平成元年に 75 歳で他界しました。

最近実家の荷物の整理をした際、押し入れのダンボール箱に、父の書いたメモ類が遺されているのを見つけました。

父は家に居るときはいつも机に向かい、何か書き物をしておりました。何を書いていたのかあまり気にも留めていなかったのですが、その書き貯めたものが全てその箱に入っていたのでした。戦時中の回想メモ、随想、俳句・短歌、各年の手帳等です。

読んでみますと、父は少年期から日記を付けていたらしいのですが、愈々戦争に従軍という時に全て処分したそうです。そして戦後になって少しずつ思い出しながら書き留めていたようです。

私は父から戦争の話しを殆ど聞いたことがありません。たまに話をしても、「すぐ隣にいた部下が機銃掃射で頭を撃ち抜かれ即死してしまった、同僚・上司を随分沢山亡くしてしまった。」とポツリと言うくらいでした。

父は職業軍人でしたから、回想メモを読んで感じますのは、一般人と違い、戦争に臨んでの心の持ちようには、悲愴さとか戦争に行かされたという被害者意識など全くなくて、意気盛んに出陣しているということです。軍人であればいざ戦争と国が決定したからには、当然目前の敵と戦わねば国が滅ぶ、という気構えだった様です。

「そもそも日本人が日本を守らなくて誰が守るのか、自国を守る軍隊を持つのは独立国家として当然のことであり、永世中立国のスイスにも軍隊はある。」と独立国家は軍隊を持つべしが持論でした。

この回想メモを遺していたのは、そういった祖国を守ることを忘れてくれるなという父からのメッセージと思い、今回纏めてみた次第です。

内容はあくまでも父の記憶によるものであり、事実と相違するところがあるやも知れません。また個人的な感情で他人を表現している処もありますが、あくまでも個人的な見方としてご容赦下さい。

系統だってはいないメモ書きでしたので、私なりの構成にしております点申し添えます。

水谷　美澄（次男）

海軍兵学校時代

S6.4.1~S9.11.17

私の海軍生活は昭和６年４月１日の江田島海軍兵学校入校に始まる。第 15 分隊の４号生徒（１年生のこと）となったその晩に同分隊の１号生徒から往復ビンタの鉄拳を加えられた。理由は「娑婆っ気を抜いてやる」ということであったが、よくポンチ絵にある目から火が出るところを体得して、怒りよりもしまったと思った。自分みたいな体力不十分の者の来るところではなかったと思った。しかし故郷出発にあたっては、入営祝いに準じて部落及び親類が酒盛りをして、幟を立て駅まで送ってくれ、村長及び小学校長が駅頭で一場の訓示までして壮行を祝い、前途を祝福し激励してくれた。両親も村から初めての兵学校入学だから頑張りなさいと云ってくれたので、男の意地で今故郷に戻り別の学校を選ぶわけにはいかないと感じ、痩せ我慢をして頑張ることにした。もっとも祖母は「はやく満期をとって帰って来い」と云ってくれたけれども、これは兵学校を知らないからのことで甘えるわけにいかない。

学校の教育・生活は体力の点でやや重荷であった。青マーク（受診患者）をつけることが多くて、どうにも綜合成績は上位にのびず上から 1/4 か 1/3 の席次に止まった。兵学校の制度はいつでも成績順に並べられるので、すぐ自分でも同級生の中の何番かがわかるようになっている。はっきりしていて却って良いと思った。若さと情熱に燃えた生徒の自治でやって行く生活館の生活は、時に辛いこともあったが、やはり天下の俊秀の集うところであり愉快だった。各々生徒であることの誇りを強く胸に抱いていた。

昭和６年８月の初めての夏休みはうれしかった。次の年に機関学校、経理学校に入校した森田康君（現姓古沢）及び黒田坤一君あたりが一番先に駆けつけて来てくれ、阿蘇の山、人吉の川など思う存分に遊び廻りいわゆる洗然の気を養った。冬休暇にも帰宅

し、正月は未明から隣村の陸士に行っている益田兼利君（現在陸将補）が必ず誘いに来るので、田原坂に西南戦役の昔を偲ぶのが例であった。その時にいつも私がお雑煮を食べないで出かけるので、亡き母が益田氏に餅はいくつ食ってきたかと聞くと、年の数と答える。そうするとあなたは３っしか食ってないからも少し食べて行きなさいというのが口癖で、これも懐かしく耳に残っている思い出の会話だ。益田氏は陸軍であり、体力があり足も丈夫なのでついて行くのに苦労したことを思い出す。

昭和７年８月兵学校二年生の夏には級友と共に計画して富士山に登った。初めての経験であった。八合目の寒い石室に仮眠して、山頂で雲間の御来光を拝して、何か神代の人になった崇高な自分の姿を一瞬直感したことを記憶している。丁度お遍路さんのようにゴザを肩からつるし、麦わら帽子をかぶり杖をついている格好が、今も何処かに残してある写真帳の中にある筈である。

次いで級友菊地氏の宅にお邪魔して初めての東京見物をした。浴衣に下駄ばきで一管の笛を腰にさして闊歩し、海老天をぱくついた記憶も懐かしい。凡そ今を去る 31 年昔の話であるのに昨日のことのように思い出される。

級友の家が千駄ヶ谷で明治神宮のすぐ近くなのでよくお参りに行き、その森を歩いて明治をしのび祖国の前途を憂えたりしたものである。外に印象に残っているのは、新橋演舞場で見せてもらった新国劇である。澤正はすでになく、島田正吾と辰巳柳太郎とのコンビで、たしか国定忠治と小村寿太郎だったように思うが、何か心に迫る迫力があり、劇中の人になって共に悲憤したように思う。確かに若い人にアッピールする何物かがあった。

２号生徒（三年生）になっていよいよ江田島生活に馴れ楽しさが増した。それにしてもやはり体力的には重荷で訓練は青マーク

で出られない場合が多く、余り気にもしなかったが成績は上から1/4から動かなかった。学科点だけではどうにもならないのがこの学校の成績のあり方である。一年生では15分隊二年生は7分隊、三年と四年は同じ10分隊で暮らした。昭和8年11月に最上級生1号生徒になって天下を取ったわけだが、その頃は連合艦隊司令長官か兵学校1号かと云われたくらいだから、良い気になったのも当然である。しかし自分が相当鉄拳をくらって苦労したので下級生をなぐる気には全くならなかった。伝統的制裁が、夜実施され仕方なく手桶に水を用意して冷やしながらなぐったが、後で自分の手が血だらけになっていた。そしてなぐることも相当の努力が必要なことを体得したので、以後は怒鳴るだけでなぐるのはやめた。

兵学校の年中行事は猛訓練が多く何れも印象に残るものばかりであったが、今思い出すと苦労よりもなつかしさの方が多い。入校直後の基礎教育はその大部分が陸戦訓練と短艇訓練とで、相当以上の筋肉体力を必要とするので、約一カ月なのに可なりにへたばった。特に短艇は初めての経験なのにいきなり猛訓練に入り、手は豆だらけで尻は血だらけという余り格好のよくない始末に相成った。

遠泳訓練。宮島から10浬の遠泳も一苦労だ。楽しい幕営訓練も海水浴でなくて本当に海水泳なのだから叶わない。これは水泳の技量によって距離は6、8、10浬と分かれている。朝の6時から入水して兵学校につくのは大体夕方の6時で、丁度12時間の水泳だが、体重は4kgは確実に減少する。海中で小便もし、握り飯もかじるわけであるが、途中の潮流が何度も変化するので、近いと思う安渡島も江田内の入口もなかなか近付かないので閉口した。しかしこれが痩せ我慢養成にはもってこいである。しかし

終日潮につかり陽にさらすので顔は真っ黒になり、つづいて許可される夏の休暇の帰宅の車中で、ボロボロと顔の皮が剥げてきてみっともない黒白ダンダラの顔と相成る。

夏休暇後には弥山（宮島にある）登山がある。これも分隊単位の対抗競技なので、その準備訓練を各分隊毎に古鷹山をつかって猛練習する。わずか 28 丁（約 3km）で大体 40 分位が遅い方なのである。けれども服装が冬制服にゲートルを付けて短剣を下げ糧嚢・水筒を背負っている。この全くスポーツ不適の姿でやるのだから汗だくだくで、中には完全にのびてしまう者も２、３名あった。同時に登った英語会話のベリック教師が、ランニングシャツ一枚ですいすいと追い越して行ったのにはつくづく嫌気がさした。一寸記憶違いがあるようだがこの実施時期は夏休み後ではなくて冬制服の終りの５月頃であったような気もする。その後にどうも小銃射撃競技が６月から７月始めまで続いたような気がする。どうも 30 年も昔のことになると、全く記憶に自信がなくなってしまったが一度確かめてみたい。

秋には原村（呉市の北東）の陸戦演習がある。丁度松茸の出る頃で西条町近くの演習場を使って戦闘・実弾射撃まで実施し、毎日毎日泥んこになって小銃と共に駆け廻り、転げ廻る。そして頭上を越える実弾のシューツ､シューツという音を体験したりした。戦車やジープは一切なく馬もなく、すべて陸戦隊式の足のみに頼る演習で、一週間乃至十日間である。宿舎はこの地が陸軍の演習場なので小屋が出来ておりその中に寝るが、ずっと着たままで垢だらけとなる。最後に 15㎞乃至 20㎞ばかりの道を追撃、突撃、退却を繰り返し、大部分を武装したまま駆足で江田島の対岸である坂か天王まで出てくるので、これは一寸つらい。特に退却部隊の殿隊として友軍の退却を援護する役目が一番つらく、それはよ